

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	トランスフォーメーションの獲得 II : 英才児の世界定め (心見)
Author(s)	葛西, 琢也
Citation	児童の言語生態研究 , 16 : 61 - 70
Issue Date	2004-02-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045193
Right	
Relation	



特集

子どもの 神性と野性

トランスフォーメーションの獲得Ⅱ

英才児の世界定め(心見)
うらみ

葛西琢也

はじめに

子どもの神性と野性に近づくために、絵を見て作文を書くという方法をもちいた。子どもたちが「白い時間」と題した絵を見て、どのようなイマジネーションを触発されているかの報告である。何を見たかよりもどう見ているかを問う必要があるからであるが、代表的なものとして「仮想の追憶」とも呼ぶべき事例があった。さらに、6年生の事例の中にイマジネーションの子見性の働いていることを見いだしたのである。資料として用いた作文は、私立聖徳学園小学校の知能指数140以上の子どもたちのものである。

1 「白い時間」の触発

子どもたちが見たものは下に示したようにポスター仕立てになったもので、B4版にカラーコピーしたものを用いた。印刷では見えにくい絵の右下に

「白い時間」記されている。

画面中央に後ろ姿の男の子と、それよりは年上と見られる少女が横顔を見せて描かれている。二人のいる波打ち際から目を手前に移すと、ガラス窓の向こう側に籐椅子に座った大人の男女の後ろ姿がある。画面の最も手前の室内にはさまざまな品物が並んでいるが、

どのように人間関係を設定するか期待は大きかった。といって、子どもたちが何を見ているのかを見ようとしているのではない。子どもたちが、この絵が設定した時空・世界によって刺激されどのような時間、空間、人間を設定するか、これが見たいのである。

左隅の写真立てにはこれも後ろ姿の男女のスナップ写真が入っている。これも波打ち際でのものだ。この3組6人の男女に注目した子どもたちがどのような物語・ドラマを作るのか、

「笹倉鉄平原画展」の文字の下には、展覧会の期日、場所、作家来場サイン会等のメッセージがあるが、子どもたちには省いたものを見せた。



資料1

男と女の家

3年・男子H・M 平成13年度

ある日、ものすごく晴れたので外に出ることにしました。お父さんとお母さんはベンチに座り、子供たちは海の散歩に。子供たちが、家から少し歩いていってしまいました。お父さんとお母さんは、家にいた犬を連れて子どもたちと反対方向に歩いていきました。すると、見知らぬおばあちゃんに出会いました。「ねえ。そこのおばあちゃん。後ろすがたを写真でとって。」そして写真をとってもらいました。「家にかざっておこう。」お父さんがお母さんに言いました。そして帰ってきました。子どもたちはもうとつくとつのように帰って来ていました。(後略)

資料2

人間とどうぶつ

3年・男子D・T 平成13年度

この絵を見ると、海の音が聞こえてくるような気がする。人間とどうぶつがあそんでいるような気もちになった。まどの外であそんでいる子がいる。いすにすわっている女の人のとなり、ほうしをかぶった男の人がいる。その人たちが、あの二人のお母さんとお父さんだと思う。そして、まどの中がわのは、海であそんでいる人の家だと思う。そして、まどの中がわの一番左がわにあるしゃしんは、いすにすわっている女の人と男の人だともう。そのしゃしんのまん中に犬がいる。そのひとたちがかっていたんだけど、今はしんでいるかもしれない。でも生きているかもしれない。(中略)

この絵を見たとき、ぼくはとてもおちつくきがした。

犬を死んでいるかもしれないと捉えているところにも、時間のイメージを認めることができると思う。30例中この1例である。

このほかに「笹倉鉄平の一生」と題す

るものがあり注目させられた。画面の中の描かれた人物ではなく、絵の制作者に目が留まったのである。原稿用紙25枚は使うよ、と言いつつ書きはじめたが未完である。

資料3

笹倉鉄平の一生

3年・男子K・T 平成13年度

笹倉鉄平は、おかあさまから生まれた。笹倉さんは0才のまだ赤ちゃんなのに、じょうずな絵がかけました。笹倉さんは、一才のたんじょう日をむかえました。笹倉さんは、たんじょうびにいろえんぴつとじゅうちょうを、もらいました。さっそくつかってみた笹倉さんは、ばらの絵を書きました。このえはすごくうつくしいので、母も父もうれしくてなっていました。(後略)

このような年代記風であるので、「一生」をどうまとめるのか、いつまでかかって終わるのか。それよりも考えなければならぬのは、絵の展覧会のポスターを見て「一生」という時間のイメージでまとめたことである。画家という仕事が生というイメージをもたらしめたのか、「画集発刊記念」などのことばの力なのか、他の要因があるのか

断定のできないことである。しかし、このような場合、創造性の発露としてのイマジネーションの発動を認めざるを得ない。

② 4年生

6人3組の男女を血のつながった者どうし、祖父母、父母、そして孫たち3代に渡るつながりと捉える、そのような考え方が明瞭になってくるのがこの4年生頃のようなのだ。

資料4

無題

4年・男子K・K 平成13年度

ある夫婦はのどかにくらしていた。老後を、一生をこの家でくらす。

この夫婦のところには、毎年まごが遊びにくる。子供たちも目を輝かせて、行く行くとうつたえるのだ。この家は子供たちが育つのはとてもいい場所で、子供たちの父母、つまりこの夫婦の子供もいっしょに住みたかったらしいが、仕事などのついでですめなかつたらしい。ひっこし場所を見に行ったら、子供が、「また行く!」

といて、毎年行くようになったの

だ。

この夫婦もまた、子供たちが来るのをとても楽しみにしている。子供たちを見て、元気が出てくるからだ。

最初に来た時は子供たちは遊びざかり。

「いっしょに遊ぼう！」

と言われて、ついていきいすにすわって見ていたら、小さい時あんなことあったなと思いい出に浸っていた。

これも、次に示すものも、語り手としての意識が明瞭になっている例と云える。これまでは気の付いたことを話したり、感想めいたことを話してたりだったが、語り手の所在が明瞭になってきている。語り手は画面の中の人物ではなく第3者と考えて良さそうである。語り手の位置が第3者となったためであろう、前者では「小さい時あんなことあったなと思いい出に浸っていた」、後者では「二人の思いい出をききこんでいる」ということばから分かるように、思いい出を語る構えになっていることである。さらにいえば、画中の人物の人生を、語り手すなわちこの文章の作者が語っている型になっている。イマジネーションの創造性が一層明瞭である。

資料5

写真の中に

4年・男子R・M 平成13年度

この一枚の写真の中に二人の思いい出を、ききこんでいる。

写真を見ると、二人が手をつないでいる。これは二人でとても楽しい思いい出をしている。それから二人は恋に落ちたと考えられる。さいしょはどんなにか大変だったことだろう。けれど、少しの時間が二人にとつての、時間になる。デートはやっぱり恋に落ちた海。

そして、月日はたつていく。二人の恋はそう甘くはなかった。そして、プロポーズ。「好」と書いたおわんの入れ物をわたした。

そして、二人の子を持ち、白い時間たつていく。

文章の作者は、画の中にいない人物、思いい出を語る語り手を想定している2例であったが、次の例は、作者が時空転換のイマジネーションを起こしていると思われる。文章の作者はこの絵に侵入し、この海辺の部屋にいて外を見ている。眼前に展開する光景は、自分の来し方いや遙か昔を思いい出させる契機となっている。作者は90歳の老婦人になっている。

資料6

無題

4年・女子M・K 平成13年度

ふと思いい出すと、もう年月がたつているものだと思つた。あるとき私は、15歳であの人と出会った。今思いい出すと、幸せだったなとふと思う。

この海辺で、二人で遊んだっけ。ちよつと考えてみると、あの人も思いい出しているらしい。

いい気分。また、昔にもどりたい。だがおそかった。気がついたらもう年をどんどん重ねていて、もう90歳をすぎていた。

今ここから、こうしてながめてみると、いろんな時にここから、ペランダのいす、海辺でながめていたきおくがある。

今、私はひとりぼっちではない。あの人は死んだが生きている。それは、なぜか。若いころの私にそっくりな女の人、あの人にそっくりな男の人がいてくれる。もちろん、その二人もむすばれる。

前も幸せ、今も幸せ、これが私の今の気持ち。

この絵によってM・Kさんは人格交換を起こし90歳の老婦人になった。

部屋の中から老婦人は眼前に展開する光景を見ているということは、この絵が老婦人の存在する時空、つまり老婦人を住まわせる世界を決定したことになる。この点が、第3者の立場から語り手として語るうとする前2者との大きな違いである。

15歳で出会ったあの人、今はもう死んでいるというのだから、窓の向こう側に広がっている光景はこの老婦人の遠い日の思いい出、幻視というべきなのだろう。若い頃の自分たち二人にそっくりな二人は画中にはいない、即ち眼前にはないと理解せざるを得ない。今ここで問題にしなければならぬことは、4年生の児童が追憶とも言うべきイメージ運動を起こしていることである。この子は、この絵を見て、自分の過去を思いい出したわけではない、この絵がこの作者を別時空に拉致したと考える。その別時空で垣間見たことを語ると、このような物語になったということだと思われる。言うなれば、仮想の追憶を起こしているということである。10歳の少女が仮想の人生を回顧している、それも難なくこのようなイマジネーションを起こしていることに注目するならば、ユングの言う現実意識世界と潜在意識世界の間の相互作用が生じていると考えられる。この相互作用には意識のみの統合を超えた高次の全

体性への志向が認められるという。この相互作用の過程があるから子どもたちは人間存在を考え、人生を考える意識をリードすることになるのだと考えている。

上原先生は、最終講義において師である折口信夫に次のようなことばのあることを紹介した。「古代日本人の信仰生活には時間、空間を超越する原理がすでに備わっていた。」時間空間のを転換させる、意識世界へ連れ去ってしまうと言ふことである。さらに、「因明以前、つまり原因結果というような論理を思いつく以前の日本人は、或いは、教えられる以前の日本人の感情の論理においては後生までも時代地理錯誤の後を残している。」という指摘のあることを紹介した。われわれは、時代や地理を錯覚する、時間を超越する能力を持っていると、その復活を凶らねばならぬというお考えである。

この子どもたちが、3・4年生だということは意識世界の分母分子の関係が逆転し始めているところだということである。潜在意識を分母とし顕在意識を分子としてきた低学年時代を終え、現実意識を分母とするようになっていくと言ふことである。一般的にはこの時期の子どもたちは現実志向を強めている、すなわち潜在意識世界から顕在意識世界へ住み替えを始めているという、

その時期に至っても英才児はイメージネーションの誘導によって、苦もなく別時空を垣間見ることが出来る子どもたちもある。繰り返しになるが、噴出するイメージが現実意識世界をおおってしまふということである。ここに意識の相互作用を認めることができると思つている。顕在意識世界へ踏み込みながらも、潜在意識世界をはなさない子どもたちだから、次なる問題意識が視野にはいるし、新たな発見に至るのである。

2 イマジネーションの予見性

6年生の中に、次のような注目すべき例が見いだされた。

資料7

妻への思い

6年・女 A・E 平成13年度
私の名は、笹倉 鉄平といい、画家である。五年ほど前に妻を亡くし今は孫娘と共に暮らしている。
私は、来月に展覧会を開くことが決定していた。どの絵を出そうかと
思い悩んでいると、時々妻が現れて、「あなた、がんばってる？ 今度の展覧会、私も見に行くわ。」などと声

をかけてきたりする。

そんなある日、家の奥の方から一枚の絵がでてきた。その絵は、私が二十年前に描いた絵だった。自分の記憶の中からすっかり消し去られてしまっていたその絵。題名は「白い時間」となっている。

「こんな絵、いつの間に描いたんだろう。この家にあるのだから、自分が描いた事に違いないが……」

私は必死で思い出そうとした。しかし、いくら思い出そうとしても全く思い浮かばない。不思議に思っていたその時、
「その絵を、ポスターにお使いなさいな。」

どこからか声が聞こえてきた。あたりを見回すと、そこには妻が立っていた。その表情には、何か懐かしさを感じられた。妻の表情を見たとき、私は頭のすみに何かひっかかるものを感じた。が、なぜか瞬間的に私は決意した。「この絵を、ポスターとして使おう。」

そして、展覧会当日になった。開場は午前十時。それまで、美術館の外ではお手伝いの人たちが、ポスターを配っている。三十分ほど前に、そのうちの一人が、美術館に飛び込んできた。
「笹倉さん、見てください。何か妙な

文字が書いてあるんですけど。」

見るとそこには、「鉄平君やつと再会できるね。」と書いてある。その時は私は確信した。間違いない。これは……

午前十時。開場と共に、たくさんの人々が流れ込んで来る。私は奥の方で待機している。なかなか人が入っている。今回は成功したようだな。でも、私がここまで成長したのは、あの人のおかげで……

「鉄平君」
どこからか少女の声があった。前を見ると、そこには

「恵美ちゃん」
私の記憶がどどんフラッシュバックして行く。

「鉄平君、久しぶりだね。元気だった？ あの絵をポスターに使ってくれてどうもありがとう。おかげで、今日鉄平君に会うことができたんだから。」

「恵美ちゃん。昔、海へ行つたよね。そこで砂浜の上を散歩したんだよね。それに可愛い犬も飼ったよね。あのころは本当に楽しかった。また、戻って来てよ。」

気がつくと目の前にいるのは少女、ではなく、成長して大きくなった、私の妻であった。でもそれもつかの間に、消えてしまった。
今のは幻なのか。いや、そうでは

ないだろう。私の心の中には、今でも妻は生きているのだから。

展覧会が終わり、ふとポスターを見てみた。

「やっぱりな……」

窓の奥の砂浜では、二人の子どもが散歩している。これは友達同士だった頃の私たちの姿だ。左下の写真には、結婚したときの二人の姿がある。犬も一緒だ。

「おや、これは誰だ？」

窓の外に、二人の人間が座っている。一人は自分だが、もう一人は妻ではない。とすると、

「孫だ。」

つまり、この絵は自分の人生を描写したものであり、また亡くなった妻への贈り物だったのだ。妻もきつと天国からこの絵を見ているのだろう。この絵は幻である。しかし、幻であると同時に、今の世界と天国を結ぶ、かぎのようなものでもある。だから、会うことができたのだ。

この絵は、私にとって、最高のプレゼントとなった。

子どもたちが絵の中の3組の男女をどう捉えるか、これに注目しなければならぬ。この3組の男女の関係をどう設定するか、そのことよってこの絵の時空が決定するからである。この

本文に先立って書かれたメモを見るとA・Eさんは、「三組の人物は、ひとり

をのぞいて同一人物だと考えた。」と言

い、「年を追って順に描かれているように

思った。」と、付け加えている。本文

にあつたように波打ち際の二人は少年

少女時代のふたり。画面左下、写真立

て一枚の絵の中に書たというのであれ

ば、経年変化を一つの枠内に収めたた

だけのことになる。しかし、本文もお終

いのところで、「この絵は幻である。し

かし、幻であると同時に、今の世界と天

国を結ぶ、鍵のようなものである」と書

いているところに注目するならば、A・

Eさんが捉えていたものは現実時間で

はなく、一つの特異時間帯であること

が了解される。現実時間に突如現れる

非現実空間、これをもたらししたのは「白

い時間」であると考えている。作品とし

ては少々分りにくいところがあるに

しても、今は亡き妻があつた世からし

ば訪れる。少女時代の姿でというこ

とまであつた。現世と来世と言ひ換え

てもかまわない問題だと思ふが、そこ

を往來する妻の物語でもあることを考

えるならば、そのような時空へA・Eさ

んを連れ去つたのは「白い時間」であ

うし、何よりも神性はこのような時空

に求められるべきものと思う。現在、過

去、未来という継起的時間を超えて発

生する時間、そこに私たちはあの世を

見てきたのでないか。拙稿では、これを

英才児という特定の子どもに生じた例

外的現象とは考えない。この時期の子

どもたちには共通の現象であつて、本

来子どもたちは、このような時空を生

きていることをこの資料は示している

のだと考えている。その意識化、言語化

の能力の違いがあるのだと考えられる。

もちろん、作品を書くときのテクニッ

クとして、あるいは趣向を凝らす意識

がこのような時空設定として現れたの

ではない。そのことを子どもたちの書

き残したものから確かめたい。

資料8

6年・女M・R 平成13年度

私は「白い時間」というと未来を想像する。窓のこちら側が現実で窓の外、つまり海側が未来だと思う。そして写真の中は幸せな過去だ。

資料9

6年・女K・E 平成13年度

海岸で遊んでいる二人、写真の中の二人、椅子に座っている二人、こ

れは全ておなじ二人だと思う。海岸の二人は幼い友達、写真の二人は結婚した夫婦、椅子に座っている二人は若い恋人；二人の過去、現在、そして未来。作者自身の過去を書いたのだと私は思う。

両者ともに合理的に考えた結果であろう。ひとつの画面を分割し、過去現在・未来を当てはめたという考え方がある。特に疑いもなく、三つの世界をそれぞれのもとして、ただし同一人物の世界として、ひとつと考えている。多くの子どもたちがこのように考えていて、この時期の一般的な傾向と言つてよいと思う。

資料10

6年・男S・A 平成13年度

窓の外を見てみると女の人が一、男の子が一人いる。そしてそのまわりの色は白くなつていて、あまり姿が見えない。これは、昔の自分と母に似ているのでこれをポスターにしたのかもしれない。また、写真立ての絵は、今の自分を描いていて、それが浜辺と窓際にあるということは、窓で現在と過去を分けているのかもしれない。このように僕は考えた。

これも上記8、9と同じように合理的に考えたものとしてよいと思うが、窓に着目したところに、現象の背後を透視しようとする視線を認めることができる。この直感、先の2例にはなかったものでないか。境界領域などということは知らなくても、意識の内に動くものを捉えている。次に示すのもその直感が働いていると思われるものである。この直感はもうイマジネーションと認められる。

資料11

6年・男子 T・H 平成13年度
日光をあびながら海で遊ぶ子どもたちを見て、「白い時間」という題名の強調性を感じた。さらに昔の写真と窓の外にいる人たちを対照して見てみると、過去と現在の時間の差を書いていないので、その空間を「白い時間」というふうにあらわされているのかもしれないと考えられた。

T・H君が「過去と現在の時間の差」、これを「その空間」と言い換えていることに注目するならば、継起的時間が意識されているのではなく、突発的特殊時間帯を捉えているのだと考えられる。経過を捉える意識より転換を捉える直感に気づいているように思える。即ち彼が、過去と現在の時間の差を書

いていないという言い方をするのは、時空転換ということ捉えているからであろう。過去が一足飛びに現在になったという意識である。一瞬のことであるが、明瞭に見えている、T・H君にそのような意識の働きの見えているから言えたことでないか。

資料12

6年・男 K・A 平成13年度
外では波打ち際を親子が歩いている。息子は海で遊ぼうと波に向かう。母はというと、何かを気にしているようだ。かもめかもしれない。それを椅子に座った父と娘が見ている。しかし、この平和的光景にも悲しみはあった。もつとも、その後ろに広がる静かな部屋とともに忘れ去られてはいたが。

これは、筆者K・A君に生じたイマジネーションを書き留めたものと考えられる。時空転換のイマジネーションを想定せざるを得ない。この「平和的光景」とともにある「悲しみ」という世界定義は、今まで見てきた四例のような分析的、批評的な意識活動からは生まれない。事実を或いは現実をイメージがおおっている、それを場として、事態として捉えたのである。「しかし」と言い「もつとも」とも言っているのはその確

信を自ずから語っているように思う。K・A君は、この絵がその存在を規定する世界へ連れ去られたのである。連れ去られた時空でK・A君に垣間見えたものは、絵の中の住人である窓の向こう側の4人が忘れてしまった悲しみ（悲しい過去）であった。さらに拙稿では、この平和的光景の中にいる4人も悲しい未来を背負っていると予見したとも考えてみたいのである。このことは後で、「心見」の問題として改めて取り上げる。

T・H君とK・A君の二つの資料から言えることは、「白い時間」が触発した時空とは過去と現在が、未来と現在が出会う時空であり、三つの時空が同時に生成する時空だと言うことができよう。このときは現在だけを生きているのではなく、過去とも未来とも接触しつつ生きていくことになる。すでにこの世から去って行ってしまった人、これからこの世に登場するであろう人とのつながりの中で生きていくことを、即ち人間を生きる視力・姿勢をこうして獲得して行くことを二人の書き残した資料は語っているのだと思う。

上原先生は、このような時空転換のイマジネーションをトランスフォーメーションと呼んでいたが、これは古代人の時代地理錯誤のことである。現代の子どもたちに古代人の時代地理錯

誤の能力が生きているということであり、野性と神性の発現はこのようにして生まれた時空でのことと考えられるのである。

3 イマジネーションと英才児

ここに、「生涯発達心理学に『死生観』と『循環する時間』を」と題する論文がある。(山田洋子「発達」76号ミネルバ書房 98) その提言の主旨に当たる部分を少し長くながるがそのまま引用したい。

私たちは今、日本やフランスの共同研究者とともに、生涯発達心理学のなかに他界観を組み込んでいく作業をしつつあります。その意義はいくつもありますが、一つには、人が過去から学び、希望や未来展望をもって生きて行くには、現実の個人の生涯を扱うだけでは不十分と思われるからです。生涯の長さを個人の一生からさらに広げて、個人の生を越えていくパースペクティブが必要です。人は自分が生まれる前に生きた人々や、死んだ後に生きている人々までを視野に入れて生きているのだと思われからです。二つめには、生涯発達心理学が「個人」中心に概念化しすぎてきたことを問い返す作業が必要だと思われまます。個人の生涯は「生から

錯覚

4年・男H・N 平成6年度

ぼくが三歳の時、おじいちゃんが死んでから1年目の一周忌の夜、ぼくだけ外に少し出ていたら、目の前におじいちゃんがいたのです。何を言っていたのか、聞こえたみたいだったのが、この「元気でね」の一言だった。

ぼくも「うん。」といった。そして、おじいちゃんが笑ったのです。ぼくがこのことを錯覚だと思ったのは、二日ぐらいたってからです。

て明瞭にイマジネーションが噴出すると、そして頻繁に発生すると顕在世界と潜在意識世界の二つの世界のあること、その違いを早期に気づき考えるようになると考えている。さらに、この二つの世界を行き来する自分というものを、これも早期に意識し対象化するようになると考えられる。自己意識の発生である。人間成長の階梯としての意識の対象化、自己意識の獲得がここに見えてくるのである。

H・N君の語ってくれたもの、A・Eさんの物語もそのことを明瞭に示している。H・N君の例は不時突発的な例と考えられる。不時突発といっても巡ってきた一周忌、そして夜というイマジネーション発生の条件は整っていたということである。何度もイマジネーションの発動が起きるとその慣習化が進む。見立てはその一例であるが、Aさんのものは慣習化が進み操作の意識、物語することが顕著になった例としてかんがえられる。またこの明瞭な操作の意識、或いはその操作の指示を「事実」と反対のことを仮定し想像する」と言い換えることも可能だろう。これについては授業レポート「子どものイマジネーションの発動性(母さんの歌)」(P112)を参照してほしい。

死まで」の直線的な図式では不十分であり、「世代間伝達」を含む、より大きな歴史的ライフサイクルの中で考えられなければならない。世代間伝達にまで視野を広げれば、生涯という時間軸がより長くなるだけでなく、歴史的文脈の中に個人の人生を位置づけ意味づける視点が必要になります。死生観や他界観は、死んでいった過去の人間と、生まれてくる未来の人間を長い時間軸でつなぎ、その中で意味づけていくとする心理的装置でもあります。個人のライフサイクルは、歴史的サイクルだけでなく、共同体が共有する文化的ライフサイクルのなかに埋め込まれており、その中で意味づけられています。歴史的サイクルが個人を越える時間軸状の位置づけ作業だとすれば、文化的サイクルは個人を越える空間上の位置づけ作業だと言えましょう。

ここで言われていることは教育において、何よりも学校教育が忘れてきた問題点だと思う。人間存在をどう捉えるか、日々子どもたちと向き合っている私たちの基本姿勢も問われているのだと思うし、何よりも子どもたちが既にそのように生きる姿勢を示していることを、私たちの責務として受け止めるなければならないだろう。子どもたちに、自分たちの感覚がどう働いてい

何が見えているのか、そのことに気づいてもらわなければならない。特にイマジネーションとして捉えたものを、君がいま捉えているものこそ本来のものであり、真の姿であると知らせることができるのは私たちである。

「白い時間」に触発された子どもたちが捉えたものは、山田氏の提言の裏付けとなるべきものとも言えよう。子どもたちの、視線の先にあるのは「個人のライフサイクル」ではなく「ライフサイクルの中の個人」である。

私たちは、「人生」も「人間」も単に言葉として覚えただけでなく、イマジネーションとして把握してきたのだと考えられる。言葉の真の意味に到達するにはイマジネーションが必要だった。イマジネーションの発動として捉えられた時、にんげんは個人を越えたものとして見えてくる。時空は、現在を過去を未来を包み込んだものとして現れる。

このイマジネーションと親密な関係にあるのが英才児であると考えている。親密とは、イマジネーションが頻繁に生じるということであるし、単に現実認識と言うことでなく、イメージでおわれたものとして現実を捉える特殊能力があるということである。次の資料はその一例であると考えられる。

「夢で逢いましょう」というテレビショーが以前あったが、夢で会えたのだという喜び、夢で会いたいという思いを抱いて生きていく、そのような生きる姿勢を子どもたちに肯定してやる必要があるのだと思う。「錯覚」という知的処理が一方にあるにしても、一方でイマジネーションとともにある身体、体感とともにある夢、そのような人間把握が子どもの成長を担当する我々には必要なことをこのH・N君の事例は語っているように思う。

イマジネーション、これは英才児の発生・成長を捉える観点のひとつであると考えている。これだけ濃密にそし

4 心見の能力

夢なり白昼夢なりイマジネーションに拉致され、現実とは異なった濃密なイメージにおおわれたの世界に身を置くことの経験は、いつしか、我々に一つの発想の型をもたらしした。次の歌は我々がそのような意識の発動を受け継ぐ歴史の中に生きていることを示している。

我が背子と二人見ませばいくばくか
この降る雪の嬉しからまし

光明皇后（万葉集巻八相聞）

夫である聖武天皇がたまたま不在だったとき、雪が美しく降ったので詠んで天皇に奉った歌だという。「ませばは、事実と相反する時、こうであればいいのにと仮定した言い方である。この発想の型は「せばくまし」として定着しているが、このとき光明皇后は単に作歌の技法として「せばくまし」という言葉の操作をした訳ではないだろう。皇后の思いが眼前に展開する光景を包んでしまった、そのようにして成立した雪景色と理解される。

現代の例である。先頃、新聞の投稿欄に、拉致された夢の世界での自分を見

事に捉えた事例を見いだしたのである。（朝日03・2・5）63歳の婦人の投稿である。（横浜市大根田恭子）

○ 夢のなかのわが子

明け方、夢を見た。

私の腕を枕にした幼児の次男は、時々目を開けたり、何かむにやむにやと声を立てたりしている。私の左側にくっついていて赤ん坊の娘は、すやすや寝ている。長男はまだ起きていて、布団の周りをうろろしている。私は子どもたちがいとおしくて、うっとりしているのである。

目が覚めても、次男の体のふっくらとした暖かさや、私の脇腹にかけられた小さな手足の柔らかい感触がまだまざとあった。娘のまんまるな寝顔も、前髪の伸びた長男の細っこい足も鮮やかに思い浮かんだ。

過ぎ去ってしまった時を思うと、寂しくて悲しくて、涙が出そうだった。幼いわが子に囲まれることも、抱きしめてその無邪気な笑顔をのぞき込むことも、もうできないのだと胸が痛んだ。

朝食の支度をしながらも、色々な思いにとらわれていたが、夢の中の私が、ただただわが子がいとおしく優しい気持ちでいたことに気づいた。子育て中は、そんな穏やかな心も時

間もゆとりも持てなかった。だとしたら、私は夢の中で子育ての幸せをもう一度味わったことになる。

すてきな夢だったのだと、納得した。

不意に、昨日来宅した次男の顔が思い浮かんで、少しおかしくなった。彼は父親になったばかりである。

夢の力である。但し、誰もがこのように夢を振り返ることができるわけではないだろう。父親になったばかりの次男の手足の感触まで明瞭に感じていたという、それほど体感のともなったた夢だということにも注目しなければならぬが、拙稿の論点から取り上げたのは、「夢のなかの私が、ただただわが子がいとおしく優しい気持ちでいたことに気づいた。」という点である。つい今し方まで過ぎ去った時を思うと、寂しくて悲しくて、涙が出そうだった。幼いわが子に囲まれることも、抱きしめてその無邪気な笑顔をのぞき込むことも、もうできないのだと胸が痛んだという。そのとき反転、転換が起きたのは、夢のなかの自分を、目覚めてからこれだけ明瞭に見ることができたからである。わが子をいとしいという思い、優しい気持ちで、夢をおおってしまったから反転、転換が生じたのである。このように夢をあるいは、状況・事態・場

を心象世界でおおってしまうこと、これをこころを見る、心を見る、裏見の能力の問題として考えなければならぬ。

上原輝男先生は、これを「現実認識よりも特殊洞察力によって、心象世界をもつて敵わしめることをうらみ（心見）」として自覚していた過去があったと思われるのである。」とお考えを述べているが、それこそその洞察に驚嘆するほかない。（「心意伝承の研究 芸能編」桜楓社 犠牲論を参照）

現代においてはうらみとは怨恨のこととして疑いもしないが、これは本来、特殊洞察力をさしていたのであり、この特殊洞察力を霊視（予見）と名付けてもよいという見解である。これがうらみの根本意識であって、文字を当てれば、裏見、心見、占見のほうがより日本語だったように思うという指摘である。そのような特殊洞察力の持ち主として、先生が『菅原伝授手習鑑』の小太郎、『近江源氏先陣館』の小四郎等の童子に注目していることが拙稿の論旨との関係で特に重要であると思う。学校教育発生前には英才児という存在はなかった、しかし、歴史を振り返ってみれば同じ資質能力の子どもたちは、特殊洞察力ゆえにやはり発見されていたと考えられる。

先生は、この子どもたちが霊視（予見）する能力者として劇中に設定され

ているにもかかわらず、このうらみする能力を軸にこの芝居が作られなければならぬ理由を、もう人々は作者も含め考えてみようとしてもしなくなったのであると述べている。これらの芝居が作られたころ既に心意伝承上の欠落偏向があったのであるが、「今一度、うらみの活性化を図らねば、怨嗟だけがうらみだと思ってしまう」というお考えは、我々小学校教育担当者も受け止めなければならぬ課題だと思う。

さてここまで、英才児たちのイマジネーションが予見性を有しているその実例を6年生の作文を資料として見たのだが、さらに、5年生にも心見の例を見いだした。それにしても「白い時間」は子どもたちの心見する視線を刺激触発するものだと思う。

資料14

白い時間

5年・男S・S 平成13年度

空には雲一つなく、温かい光が海を包む。

砂浜に母と子、二人そろって歩いている。ゆっくりと目の前を親子は通り過ぎ、それを見ている二人の老夫婦。

三十年前。ようやく育った彼らの息子が、すぐに戦争に出され、それきり行方がわからないのだ。だが、彼には、人知れず妻がいた。それが誰かは分からない。だが母と子だけの姿を見ると、どうしてもそのことを思い出してしまうのだ。

だが、それは彼らの本当の孫だった。しかし、それはお互いに、永遠に知ることはなかった。それは、彼の伝説の、白い時間だった

資料15

白い時間

5年・女S・A 平成13年度

今日は、浜辺に波が静かに打ち寄せる、ある日曜日だった。

鈴は、海のそばのは母方の祖父と祖母の別荘に、弟の広貴と一緒に住んでいた。

「やっぱり、潮風は気持ちいいなあ。」一週間ぶりに、鈴は砂浜を歩いて心地よい潮風に当たっていた。「まったく、二人とも元気になったものだ。」

「本当によかったですね。」

窓のそばでいすに座り、鈴の祖父と祖母は、鈴たちを見守っていた。

鈴と広貴は、ほんとうは都会で暮らしていた。しかし、2年前母も父

も病にたおれ二人とも亡くなってしまったのだ。それから、二人はここにひきとられ静養していたのだ。その結果、とつても元気な鈴にもどったのだ。

「海を見てみると、心が落ち着くけれど……でも、ここで死んだ犬のパロや父さんや母さんを思い出してしまおうわ……」

鈴がうつむいていると、広貴が、「ねえ、どうしたの、お姉ちゃん。」元気な声で聞いてきたので、鈴は笑って答えた。

「ううん、なんでもないの。ただ、波の白さと、砂浜の白さに見とれてただけ……」

鈴の目には、白い時間だけが見えていた。

先に見た資料7「妻への思い」、資料12「平和的光景」ともにある悲しみ、資料13「一周忌の晩のおじいちゃんとの再会」、そしてこの5年生の2例に共通するのは、この世とあの世を捉えているところである。捉えられ語られた世界はこの世だけで構成されているのではなく、その背後のあの世でも言うべき世界があって成立していると思われる。人間の生き死にの問題を子どもたちは捉えている。河合隼雄がこの時期の子どもたちを、思春期が訪れてく

る一歩前のところで子どもたちはそれなりの完成に達するのではないかと言い、「この年齢の子どもに接して、何か極めて「透明」な感じを受けることもある」、「(明恵 夢を生きる「法蔵館」と述べている。河合のこの言は、この時期の子どもたちが獲得した時空の問題として考えてもうなずけるものであり、その時空は神性を帯びていると言えよう。

「白い時間」に触発された子どもたちが、拉致された時空で垣間見たものは、人間の命の問題、魂の問題、或いはあの世とこの世との間を生きる人間の姿だと言えよう。同人諸氏の論考にあるように一般的には、これは5年生6年生になってから、3・4年生の時期の意識世界の住み替えを経た後でないと思えないことのようにある。しかしながら、英才児においては6歳から12歳の12年間を見渡したところ、その様相に違いがあると言わざる得ない。英才児たちのイマジネーションの能力、裏見の能力の幼年期からの獲得という事実があるからである。

資料16

月の顔

1年・男子 Y・T 昭和61年度

月には顔はあるのだろうか
もちろんあるにきまっている

僕はちゃんとこの目で見た

僕が笑うと月も笑う

僕がガミガミおこると

月もガミガミおこる

この月には 深いわけがある

そのわけを考えたい

僕はこう思う

この月には 魂があるのではないかと

そうにちがいない

それに

顔があるのは月だけじゃない

雲やお日様にも顔はある

人間にも顔がある

動物にも顔はある

世界にも顔はある

この地球で 顔がない所はひとつも

ない

宇宙にだって 顔がないところはひ

とつもない

生きている所に 顔がない所はひと

つもない

顔はみんなの魂だ

心の風景

2年次 (昭和62年度)

僕は一人で電車に乗るのが好きだ

一人で電車に乗っている

自分だけの世界にいるみたいだ

景色がみんな

自分の心に見えてくる

心と魂

いくらだれかが

死んだからといって

何も残らないとは言えない

けれど

残るのは ただ

心と魂の二つだけ

死んで心と魂が残らない人は

地獄におちた人

生きている間に悪いことをした人

死んでからの世界というのは

心と魂の世界

それはただ人の悲しみの気持ち

そして

人が死んでいくのに

一番大切なもの

Y・H君はこのように小学校低学年の内に魂の問題を意識にのぼらせている、これはやはりイマジネーションによるものだと考えられる。このこと一つを取ってみても英才児のイマジネーションの能力は、3〜4年生の意識世界の住み替え以前もその以後も変わることなく発揮されていると考えられる。

(東京都・私立聖徳学園小学校教諭)

